

松野クララの経歴
—先行研究の整理に基づいて—

The background and career of Clara Matsuno

原田朋香*

HARADA Tomoka*

要旨

松野クララ（旧姓、クララ・ツィーテルマン Clara Zitelmann）は、日本の幼児教育においてフレーベル教育思想の導入とその方法・技術の実践に貢献した人物である。クララは、日本の幼稚園教育を語る上で欠かせない人物でありながら、現代もなお彼女の経歴は、多くの謎に包まれている。本研究ノートでは、松野クララの経歴について文献研究を行っていくうちに浮かび上がってきた通説における誤解等について整理し、なぜそれらが訂正されないまま伝わってきってしまったのかについて考察した。

1. はじめに

本稿で取り上げる松野クララ（旧姓クララ・ツィーテルマン, Clara Zitelmann）¹は、日本の幼児教育においてフレーベル教育思想の導入とその方法・技術の実践に貢献した人物である。彼女は1853年ドイツのベルリンに生まれた。松野^{はさま} 礪（1847～1908）がドイツに留学していた際に知り合いになり、1876（明治9）年、来日し結婚した²。さらに彼女は、同年に創立された東京女子師範学校附属幼稚園の主席保母として迎えられ、そこでフレーベル教育の理論と実践を日本人保母らに伝授した³。

筆者はフレーベル教育思想の日本への導入について調べる過程で、松野クララが日本におけるフレーベル教育の先駆者の一人であることを知り、彼女を通しての幼児教育導入過程の探求を試みることにし、松野クララの経歴について文献を調べてゆくうちに、様々な見解があることを見出した。そして、そこで浮かび上がってきた通説に誤解等があることがわかった。したがって本ノートでは、それらの通説を整理し、なぜそのようなことが現在まで伝播されてきたのかについて検討することにしたい。

2. 松野クララの生涯

まずはじめに、松野クララについて現在わかっている史実をまとめることとする。

松野クララ（旧姓クララ・ツィーテルマン, Clara

Zitelmann）は前に述べたように、日本の幼稚園教育の発展において、非常に重要な役割を果たした人物である。

クララは、1853年にドイツのベルリンに生まれた。北白川宮（1847～1895）に随行してベルリン近郊にあるエーベルスヴァルデ高等山林学校に1870（明治3）年から1875（明治8）年までの約5年間留学中であった日本人の松野礪（1847～1908）と出会い⁴（何年にどこで出会ったかは不明である）、婚約を交わした。礪は1875（明治8）年に帰国し、クララも翌76（明治9）年8月、結婚のために来日した。同年12月17日にめでたく結婚し、松野クララとなった。彼女が23歳のときである。その翌年には、フリダ・文（Frida Fumi）を出産している⁵。

来日直後クララは、東京女子師範学校で英語教師として勤務していたが⁶、その後、1876（明治9）年11月に創設された東京女子師範学校附属幼稚園の主席保母として、木戸孝允によって迎えられることになる⁷。その理由は、クララが幼稚園教員養成学校を卒業していた（いつ、どこかの養成学校を卒業したかは不明である）とされていたからである。クララは同幼稚園で、日本人保母や見習生にフレーベルの幼児教育理論と方法を伝授した⁸。また、園児に直接指導することはあまりなかったが、当時そこにはピアノがあり、それを演奏できたのはクララだけであったので、週2回朝の集会でクララがピアノを弾くのを、園児はとても楽しみにしていたようである⁹。

* 武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻院生（Postgraduate student, Mukogawa Women's University Graduate school of education）

その後クララは、1878（明治11）年東京女子師範学校に創設された保育練習科でもフレーベルの教育方法を伝授することになるが¹⁰、1881（明治14）年に同幼稚園の職員を辞任する。そしてその後1886（明治19）年からは学習院女子高等科（元華族女学校）で音楽教員として務めることになる¹¹。

しかし、娘のフリーダ・文が1901（明治34）年に亡くなり、続いて1908（明治41）年に夫の礪が亡くなると、フリーダ・文の子ども（クララにとっては孫にあたる）2人を連れてドイツに帰国した¹²。その後、クララは1931年、満77歳でベルリンのヴィルメルスドルフで亡くなったとされているが、クララの墓の所在は今なお不明である¹³。

3. 松野クララの経歴・活動過程についての誤解

—文献・資料を通して—

松野クララは明治期のフレーベル教育の日本導入を語るにあたって、欠かせない存在であり、様々な先行研究において触れられている。しかし、それらの中には文献、論文ごとの食い違いや誤りなどが数多く見受けられる。以下に主な3つの通説を示し、それらについて情報を整理し、正確な史実を検討した。なお、引用文中の下線は筆者によるものである。

(1) フレーベルからの直伝か？

（表1の①、表1の③、表2の①、表2の⑤参照）

まず、倉橋惣三・新庄よしこ『日本幼稚園史』では、クララについて「幼稚園のことについて詳しく、殊にその保育法の理論及實際は、フレーベルからの直伝であるといふので、女子師範学校が幼稚園を創めるに當つて、請うて主任保母に迎へた」¹⁴と記している。

次に、上笙一郎・山崎朋子『日本の幼稚園』には、「主任保母にクララ・チーテルマンというドイツ婦人を迎え、保母には、豊田英雄という婦人を迎えました。クララ・チーテルマンは、農商務省の役人だった松野礪という人が、林学の勉強でドイツに留学しているとき結婚した女性で、やはり女子師範で英語を教えていましたが、ドイツではフレーベルから直接に保育の方法を教えられたという経験のある人です。」¹⁵そして「恩物はフレーベルがつくったものですが、そのフレーベルからの直伝を誇る松野クララが主任保母にいたから、恩物中心の保育法になったのでしょうか。」¹⁶とある。ここには、「倉橋惣三・新庄よしこの『日本幼稚園史』には、お茶の水幼稚園の当時の保育時間割がのっています…」¹⁷とあり、『日本幼稚園史』を参照して、一日の保育の流れが示されている。このことから、参考文献として『日本幼稚園史』が挙がっていたことが推察される。

さらに南雲元女「松野クララの人間的側面」でも「保育の理論や実技はフレーベルの、直伝といわれている。」¹⁸と

している。これについては、何の文献・資料を参照して書かれているのかは不明である。しかし、他資料で松野クララに関する写真提供元が南雲元女氏からであることから¹⁹、彼が独自にクララについての情報や資料を得る方法を有していたとも考えられる。

また同時期に、南雲元女氏は自身の「フレーベルからの直伝である」という説を「松野クララの人間的側面（その1）（その2）」等で否定している²⁰。この研究ノートは、南雲氏が日本保育学会での発表（表2の①）後にまとめなおしたものであり、そこでフレーベルからの直伝である説について否定している²¹。

上記については単純な誤解であるのだが、鷗原晶子「Margarethe Meyer Schurzの研究(2) —M.M. シュルツと松野クララを比較して—」において「一説にはクララもフレーベルから直接指導を受けたとあるが、1852年に亡くなったフレーベルが1853年に生まれたクララに会えるはずがなく、孫弟子と考えてよいと思われる。」²²として否定しているように、フレーベルとクララが誕生した年を考えると、クララが受けた保母教育がフレーベルからの直伝であることはありえない。

では、なぜこのような誤りが現在まで伝わってしまったのであろうか。倉橋惣三は『日本幼稚園史』の「序」において、東京女子師範学校附属幼稚園の倉庫で幼稚園史に関する豊富な資料を目にしたことを述べ、それらが関東大震災による火災で倉庫も資料も一切灰となって失望したが、後に、豊田英雄宅にて記録を見つけ、再び研究への熱意をもったというエピソードを書いている²³。これを受け、倉橋が資料の再収集の際に、誤った情報を得てそれが伝えられた可能性があるとも考えられる。そして、倉橋の文献が様々な論文等で参考資料として挙げられていることから、倉橋の資料を第一次資料として用いた結果、現在まで修正されずにいることがうかがえる。

(2) ペスタロッチ・フレーベル・ハウス

（Pestalozzi-Fröbel-Haus）の出身か？

（表1の⑤、表2の②、表2の③、表2の⑥参照）

中村理平『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説—』では、洋楽の伝達者としてのクララについても詳しく書かれており、その中でクララがフレーベルに直接指導を受けたことについては、手塚竜磨氏の『東京の幼稚園』と南雲元女氏の「松野クララの人間的側面研究ノート」（その一）を例に出しながらその間違いを指摘しているが、クララがペスタロッチ・フレーベルハウスで保母教育を受けたことに関しては、生熊文氏の「松野クララとその家族」（1987）の中で「シュラーダー＝ブライマンが手掛けたベルリンでの保母養成機関がクララの受けた教育の母体ではなかるうか、と推定」していることを受け「おそらくそのとおりと思われる。」²⁴と述べている。

さらに、曾我芳枝「明治初期の唱歌遊戯教育に関する一考察—松野クララの役割を中心として—」でも、生熊氏の同論文（1987）を参考として、「ヘンリエッテ＝シュラーダー・ブライマン（Henriette Schrader Brymann）が手がけたベルリンでの保母養成機関で松野は学んだのではないか」²⁵と述べている。

これらの説に対して、酒井玲子は「日本におけるフレーベル教育の伝統—25周年記念 Jubiläum に寄せて—」で、「彼女はベルリンの Pestalozzi-Fröbel-Haus (PFH) の出身といわれて来た。しかし、年代の照合からその前身の保母学校出であったと推測される。」²⁶さらに酒井氏は、「明治期におけるフレーベル教育論の考察」においても、「シュラーダー＝ブライマン（Henriette Schrader = Breimann）がこのハウス（Pestalozzi-Fröbel-Haus）²⁷の前身の保母学校に着任したのは1873年であり、1878年にこのハウス名に変えているのである。松野はこの2年前にすでに東京で女子師範の幼稚園に着任している。」²⁸として、クララがペスタロッチ・フレーベル・ハウス（Pestalozzi-Fröbel-Haus）でフレーベル教育を学んだことを否定した上で、「松野は、改革されたハウスではなく、その前の保母学校で実践されていたものを我が国の幼稚園に導入したと推察される」²⁹と述べている。

そして、ペスタロッチ・フレーベル・ハウスのホームページを調べたところ、「ペスタロッチ・フレーベル・ハウスは1874年にヘンリエッテ・シュラーダー＝ブライマンによって創設された」とある³⁰。これだけを見ると、酒井（2001）の説は信憑性が高いように思われたが、石橋哲成氏が、実際にドイツのペスタロッチ・フレーベル・ハウスにて卒業生名簿を調査し、クララの名前がなかったことが確認され、それによってこの説も否定されたわけである。

(3) その他の経歴 (表1の②, 表1の④参照)

国立教育研究所編『日本近代教育百年史』では、「主席保母には、ドイツで保母学校を卒業し、幼稚園に通じていたとみられる松野クララが就任した。恩物の理解および保育の理論に通じていたという理由で就任したが、日本語に精通していなかったため直接幼児の指導にはあたらなかった。ただ、一週一回ピアノで幼児が遊戯する場合、ピアノを弾いており、また女子師範学校に保母養成のための保母練習科が開設されてからは、ここで保育法について講じ、保育の実際に大きな影響を与えた。」³¹とされている。

その他、文部省編『幼稚園教育百年史』では、「松野クララ（一八五三～一九四一）は、ドイツ人であるが、フレーベルの作った養成機関でフレーベルの保育法の理論と実際を学んだ。」³²としている。

松野クララは、東京女子師範学校附属幼稚園に主席保母として就任する以前に、東京女子師範学校の英語教師

として働いていたという史実がある。主席保母就任後も、保母に保育の授業を行う際は英語で行っており、関信三の通訳によって授業が成り立っていたという³³。関信三自身も東京女子師範学校の英語教官を務めていたことや³⁴、明治5年から2年にわたって東本願寺から派遣され渡英していたことから彼の英語が堪能であったことがうかがえる³⁵。派生的ではあるが、その事実からクララがドイツ人でありながら英語が堪能であったことがわかる。

クララが英語についても非常に堪能であったことから、石橋哲成氏は、「クララはドイツではなくイギリスに渡り、フレーベル・インスティテュート（Fröbel Institute）にて、フレーベル式教育を学んだ可能性もあるのではないかと」の見解を示している。しかし、これについてはまだ証拠がなく、事実かは不明である。

4. 現在松野クララについてわかっている事

上記より、松野クララの経歴について、いくつかの誤りが見つかったわけであるが、「松野クララがどこの教育機関でフレーベル式の教育について学んだか」という疑問についての答えは見つかっていないのが現状である。

松野クララの経歴に関する正しい史実を証明できない大きな要因は、第一次資料がほとんどないことである。例えば、日本で資料があった可能性が高いであろう東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）では、関東大震災で倉庫が火災に遭い多くの貴重な資料が失われている³⁶。また、クララ自身が研究者ではなかったため、教育に関する自筆の文書等が残されていないことも、松野クララ研究における大きな壁である。

松野クララについてのいくつかの誤解が、現在まで曖昧なまま伝えられてきた背景のひとつには、次のことが挙げられるだろう。それは、倉橋惣三が著書『日本幼稚園史』の中で松野クララについて述べている事柄が³⁷、後のクララ研究に大きな影響を与えていたことである。多くの研究者が、東京女子師範学校附属幼稚園の設立について語る際に、彼の著書を参照・引用をしていることからわかる³⁸。倉橋惣三は幼児教育の中心人物であり³⁹、松野クララと出会うことはなかったものの⁴⁰、東京女子師範学校附属幼稚園で1917（大正6）年から1949（昭和24）年までの長期にわたって主事を務めていたことが、倉橋の唱える説の信憑性を高めていたのではないだろうか。それに加えて、松野クララから直接フレーベルの教育法を学んだ豊田英雄から資料を得ていたことも⁴¹、同様の効果をもたらしていたであろう。また、豊田英雄からクララについての情報を得ていたとするならば、豊田は関の通訳を通してクララと接しており、そこでの情報を倉橋が聞いたことになる。又聞きする間に誤った史実が伝わってしまった可能性も考えられる。

次に、クララの子孫については、最近まで「現在クララ

につながる子孫はいない」とされてきたが、その家系が現在も続いていることが明らかになった。

小林富士雄氏、平野正久氏、石橋哲成氏からいただいた資料及び情報をもとに松野クララの家系について以下にまとめた。

現在、松野クララの曾孫にあたるハインツ氏（Nikolaus Vinzenz von Heinz）は、ドイツのミュンヘン近郊にあるムルナウ（Murnau）に在住し、家系図（図1）を見てもわかるように、さらにその孫の代まで血縁は続いている。興味深いのは、ハインツ氏の娘、ヴィクトリア（Viktoría）のミドルネームにクララの娘の名前から、「Fumi」が使われていることである。

そして、クララは礪が亡くなった後、孫を連れてドイツに帰国し、母国のヴィルメスドルフ（Berlin-Wilmersdorf）で亡くなったとされているが、霊園課で調べてもクララの墓の所在地はわかっていないという（石橋哲成氏調べ）。

上記のように、松野クララという人物については、未だ多くのことが謎に包まれている。フレーベル教育を日本で実践したという彼女が、どのような教育を受け、それを日本に伝えたのかを知ることは、日本の幼児教育において非常に重要な役割を担っていると言える。今後、日本の幼児教育の先駆者である彼女の生涯がわかれば幼児教育史において、重要な史実を得ることができるであろう。

付記：

以下に、本研究ノートで使用した文献および論文と、そこで使用された引用・参考文献について表1、2としてまとめた。さらに、様々な事典および辞典において松野クララについて記載されている部分を抜粋し、表3にまとめ、それぞれを比較し、検討した。

表1. 本稿で使用した書籍とそこでの引用・参考資料—松野クララに関する記載を中心に—

	書籍名	引用・参考資料
①	倉橋惣三・新庄よしこ 『日本幼稚園史』1930	参考文献の記載はされていない。しかし、同書の「序」から推察すると、おそらく関東大震災以前に東京女子師範学校附属幼稚園の倉庫から得た資料と、震災後に豊田英雄から得た資料によって書かれたと考えられる。
②	国立教育研究所 『日本近代教育百年史』1974	東京都『東京の幼稚園』p. 37
③	上笙一郎・山崎朋子 『日本の幼稚園』1965	p. 17にて、「倉橋惣三・新庄よしこの『日本幼稚園史』には、お茶の水幼稚園の当時の保育時間割がのっていますが…」とあり、『日本幼稚園史』を参照して、一日の保育の流れが示されている。このことから、参考文献として表1の①が挙がっていたことが推察される。
④	文部省 『幼稚園教育百年史』1979	南雲元女「松野クララの人間的側面研究ノート」『幼児の教育』1976
⑤	中村理平 『洋楽導入者の軌跡 —日本近代洋楽史序説—』1993	写真提供は南雲元女であり、松野クララが受けた保母教育が、フレーベルからの直伝であることを否定する際に、南雲元女「松野クララの人間的側面（その一）『幼児の教育』1976」を挙げている。 さらに、表1の②で参照されている『東京の幼稚園』にもふれ、クララがフレーベルから直接指導を受けた説を否定している。

表 2. 本稿で使用した論文とそこでの引用・参考資料 —松野クララに関する記載を中心に—

	論文名	引用・参考資料
①	南雲元女 「松野クララの人間的側面」1976	参考文献の記載はされていない。写真提供元はこの南雲元女氏であることが多く、どのようにしてこの資料を得ていたかは、クララの経歴における様々な謎に迫る上で重要な手がかりとなるだろう。
②	酒井玲子 「日本におけるフレーベル教育の伝統 —25周年記念 Jubiläum に寄せて—」1983	松野クララの来日とペスタロッチ・フレーベル・ハウス設立との年代を照合するために、Schrader=Breymann“Beiträge zur Geschichte Pestalozzi-Fröbel-Hauses in Berlin”No. 25, 1893, S. 6-7を参考にしている。
③	曾我芳枝 「明治初期の唱歌遊戯教育に関する一考察 —松野クララの役割を中心として—」1995	松野クララの人物像を述べるにあたって、 表1の①の倉橋惣三・新庄よしこ『日本幼稚園史』1930 表1の⑤の中村理平『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説—』1993 表2の①の南雲元女「松野クララの人間的側面」1976 池田善文「大田大野家と松野礪について」1986 東京日日新聞, 1876.11.28 読売新聞, 1876.11.28 生熊文「松野クララとその家族」1987 が挙げられている。
④	湯川嘉津美 「東京女子師範学校附属幼稚園の設立」1995	田中不二麿「教育瑣談」1907 から抜粋し、クララについて述べている。
⑤	鷗原晶子 「Margarethe Meyer Schurz の研究 (2) —M.M. シュルツと松野クララを比較して—」 1997	松野クララについての記載が何を参照して書かれたかは不明である。
⑥	酒井玲子 「明治期におけるフレーベル教育論の考察」 2001	松野クララについての記載が何を参照して書かれたかは不明である。

表 3. 事典・辞典における松野クララの項目

1	南澤志げ著「松野クララ」日本ペスタロッチー・フレーベル学会編『ペスタロッチー・フレーベル事典』玉川大学出版部, 1996, p. 375 松野クララ (1853~1941) 日本の幼稚園教育の確立に尽力。ベルリン生まれのドイツ人でクララ・チーテルマン (Klara Ziedermann) [sic] という。保母学校を卒業。クララと松野礪 (1847 [弘化 4] ~1918 [大正 7]) の出会いは松野がドイツの高等山林学校に留学中のことである。松野は山口県に生れ日本林学の祖として活躍した。クララと結婚したのは1876 (明治 9) 8月である。同年 11月創設の東京女子師範学校保母伝習科附属幼稚園の主席保母となり日本人保母の指導にあたる。78年に設置された同校保母練習科で生徒に保育学を伝授。1876 (明治 10) 気丈なクララは当時の交通事情の不便な中、出産間近の体で4泊5日間、群馬県に向き指導者層を対象に幼稚園設置の必要性を訴え、恩物の使用法や実際保育の方法を指導した。フレーベルの教授法を導入し日本の幼稚園教育の確立に与えた影響は高く評価されている。1908年 (明治 41) 夫の没後帰国、ベルリンで没す。 参考資料：南雲元女「松野クララの人間的側面」『幼児の教育』, 1976
2	湯川嘉津美著「松野クララ」日本ペスタロッチー・フレーベル学会編『増補改訂版 ペスタロッチー・フレーベル事典』玉川大学出版部, 2006, p. 387 松野クララ (1853 [嘉永 6] ~1941 [昭和 16])

	<p>東京女子師範学校附属幼稚園創設時の主席保母。ベルリンに生まれ、<u>幼稚園教員養成学校を卒業後</u>、松野礪との結婚のため来日した。東京女子師範学校附属幼稚園の創設にあたり主席保母に任じられ、日本人保母や見習生にフレーベルの幼稚園理論と方法を伝授した。<u>旧姓はツィーデルマン</u>。その内容は氏原銀の筆記「幼稚園方法」や豊田英雄の筆記「恩物大意」に詳しい。氏原によれば、附属幼稚園では松野の指導のもとにフレーベルの庭の思想に基づき、子ども本位の自然に親しむ保育が心がけられていたという。また、ドイツのゴルダマーの幼稚園書（Goldammer, H., <i>Der Kindergarten</i>, 1869）などをもとに、恩物理論も遊具遊びと作業に分けて忠実に伝えられた。1877年には群馬県に出張して幼稚園教育についての講演を行い、地方における幼稚園設置の機運を高めた。附属幼稚園には1881年まで勤務し、86年からは華族女学校の音楽教師を務めた。</p> <p>参考文献の記載なし</p>
3	<p>著者不明「松野クララ」教育人名辞典刊行会（代表 稲富栄次郎）『教育人名辞典』理想社、1962, p. 628</p> <p>松野クララ（生歿年不詳）</p> <p>わが国最初の国立幼稚園の主任保母。農商務省職員松野礪の夫人となったドイツ夫人で、<u>フレーベルから直接指導をうけた保育理論を基礎として</u>、東京女子師範学校附属幼稚園創設のとき（1876、明治9）、主任保母となって実際の保育を指導した。特に当時ピアノをひく人のいなかったとき、これをもちいて洋楽による幼児の歌唱指導に大きな功績を残した。</p> <p>参考文献：倉橋惣三・新庄よしこ『日本幼稚園史』東洋書店（初版）1930、フレーベル館（新訂版）1956</p>
4	<p>小林恵子著「松野クララ」岡田正章・森上史朗編『保育基本用語事典』第一法規出版、1980, p. 413</p> <p>松野クララ（一八五三～一九四一）</p> <p>東京女子師範学校附属幼稚園の創設当時の主任保母。ドイツ人でフレーベル（F.W.A. Fröbel）の保育法を実際の保育を通じ指導し、幼稚園の基礎を築いた先駆者。</p> <p>嘉永六年（一八五三）ベルリンに生まれる。名前を<u>クララ・チーテルマン（Klara Zitelmann）</u>といい、松野礪（弘化四～明治四十一年）と結婚し、松野クララとなった。</p> <p>松野礪は、日本の林業教育の先達となった人。山口県の生まれで、明治三年、北白川宮のドイツ留学に随行し渡独。日本の留学生としてエーベルスワルデの官立高等森林学校に学び林学を修めた。同八年、同校を卒業し帰国したが、クララとの婚約は彼がドイツ留学中に取り交したもの。翌九年、彼は東京府権知事あてで婚姻願を提出、クララが来日し同年八月に結婚した。クララが二三歳のときである。当時、松野は内務省地理寮に勤務し、同十四年に農商務省ができて、その書記官に任命されている。</p> <p>クララは、これまでにドイツで<u>フレーベルの設立した養成学校で保育法の理論と實際を学んでおり</u>、このため東京女子師範学校附属幼稚園創設に際し主任保母として迎えられた。同九年一月から十四年まで勤めたが、主任保母といっても毎日の保育を直接に指導したのでなく、おもに保母の指導の任に当たった。当時の保母、豊田英雄、近藤浜などはことごとくクララの指導によって実際の保育を行っており、日本の幼稚園教育の最初の基盤を築く上で彼女の果たした役割は大きい。当時、東京女子師範学校には、ピアノが一台幼稚園の遊戯室にあり、週二日（月、木）朝の会集で、クララがピアノを弾き遊戯を指導した。このころ、ピアノを弾けるにはクララだけであったから、園児たちは大変楽しみ、待っていたといわれる。</p> <p>同十一年には同校に保母師範科が設置され、クララはここでフレーベルの二〇恩物大意とその用法やフレーベル伝など、フレーベルの保育法を教授した。講義は英語を用い、幼稚園の監事、関信三が通訳し生徒に教えた。彼女はまた、同十年、群馬県に出向き前橋・高崎の二地区で県内の指導層を対象に幼稚園設置の必要を訴えるなど幼児教育への積極的な働きかけを行っている。幼稚園一〇〇年を記念して発行された記念切手には遊戯を指導するクララの姿が見られる。</p> <p>その後、女子学習院で音楽教師を勤めた。クララには文というひとり娘があったが若くして病歿、残された二児を引きとり養育したが、松野の亡き後は本国に帰国。ドイツにて八八歳で歿した。</p> <p>参考文献の記載なし</p>
5	<p>唐澤富太郎著「松野クララ」唐澤富太郎編著『図説 教育人物事典—日本教育史のなかの教育者群像—中巻』ぎょうせい、1984, pp. 12-13</p> <p>松野クララ（まつの くらら） 嘉永六～昭和一六 一八五三～一九四一 ドイツ— —フレーベル主義保育を伝えたドイツ女性—</p>

	<p>松野クララは一八五三年ベルリンに生まれた。旧姓はクララ・ツィーデルマン (Klara Ziedermann)。ドイツの保育学校を卒業し、フレーベルの没後は、<u>彼女が設立した養成学校で保育の理論と実際とを学んだ</u>。ドイツで林学を学び、後に日本の林業教育の先達となった松野礪 (弘化四～明治四一年) とともに来日し、明治九年 (一八七六) 結婚し、同年に創立された東京女子師範学校附属幼稚園の主席保育を同年九月から十四年ころまで務めた。また同校保育伝習科 (明治一一年創立) で教え、フレーベルの保育理論と実際とを伝えた。通訳は幼稚園監事の関信三が行い、講義は英語で行った。</p> <p>彼女の日本人保育の指導と幼稚園教育に対する影響は、極めて大きかった。当時ピアノが一台遊戯室にあったが、弾ける人がなく、彼女が週二回朝の集会で弾くのを、園児たちは楽しみにしていたという。</p> <p>明治一九年 (一八八六) 華族女学校の音楽教師となったが、明治三六年 (一九〇三) 辞任した。彼女には文という一人娘がいたが、二〇歳ころ病没し、残された二児を引き取って養育したが、明治四一年 (一九〇八) 夫と死別、その後帰国し、一九四一年 (昭和一六) ドイツにおいて八八歳をもって没した。</p>
	<p>参考文献：村山貞雄監修『幼児保育学事典』1980 倉橋惣三・新庄よしこ『日本幼稚園史』東洋書店 (初版) 1930, フレーベル館 (新訂版) 1956</p>
6	<p>著者不明「松野クララ」幼少年教育研究所『幼稚園事典』鈴木出版, 1994, p. 20</p> <p>松野クララ (1853～1941)</p> <p>日本の幼児教育の基礎を築いた先駆者。ドイツ人、<u>クララ・チーテルマン</u>。<u>フレーベルの設立した保育養成学校で保育の理論と実際を学び、卒業</u>。農商務省の役人だった松野礪 (はざま) が、林学の勉強でドイツに留学しているときに結婚。明治9年、夫の帰国の後来日。東京女子師範で英語を教え始めた。同年～14年、東京女子師範学校附属幼稚園の創立と同時に、主任保育として保育の指導にあたった。同11年、同校に保育師範科ができると、フレーベルの理論を講義した。また、遊戯室のピアノを弾いて園児たちの遊戯を指導したり、群馬県で幼稚園設置の重要性を訴えたり、幼児教育草創期の影響には大きなものがあった。同14年から学習院で、同19年からは女子学習院でも音楽教師を務めた。夫の死後、ドイツに帰国。</p> <p>参考文献の記載なし</p>

(なお、事典および辞典内の年号の漢数字による記載や旧漢字については、事典・辞典の記載をそのまま掲載している。表3-5の「彼女が設立した養成学校」という記載についても、「彼女」は「フレーベル」を指し、「彼」の間違いであると考えられるが、そのままを掲載している。また、表中の下線は筆者によるものである。)

以上を見てわかるように、クララの旧姓「ツィーテルマ

ン」のカナ表記および欧文表記だけでも、各資料で異なることがわかる。

フレーベル式教育を学んだ場所についても、記載が様々、かつ曖昧なものが多い。公に認められる事典及び辞典においても内容に違いがあることから、いかに松野クララの経歴に関する資料が少なく、確証のない情報が多いかが見てとれる。

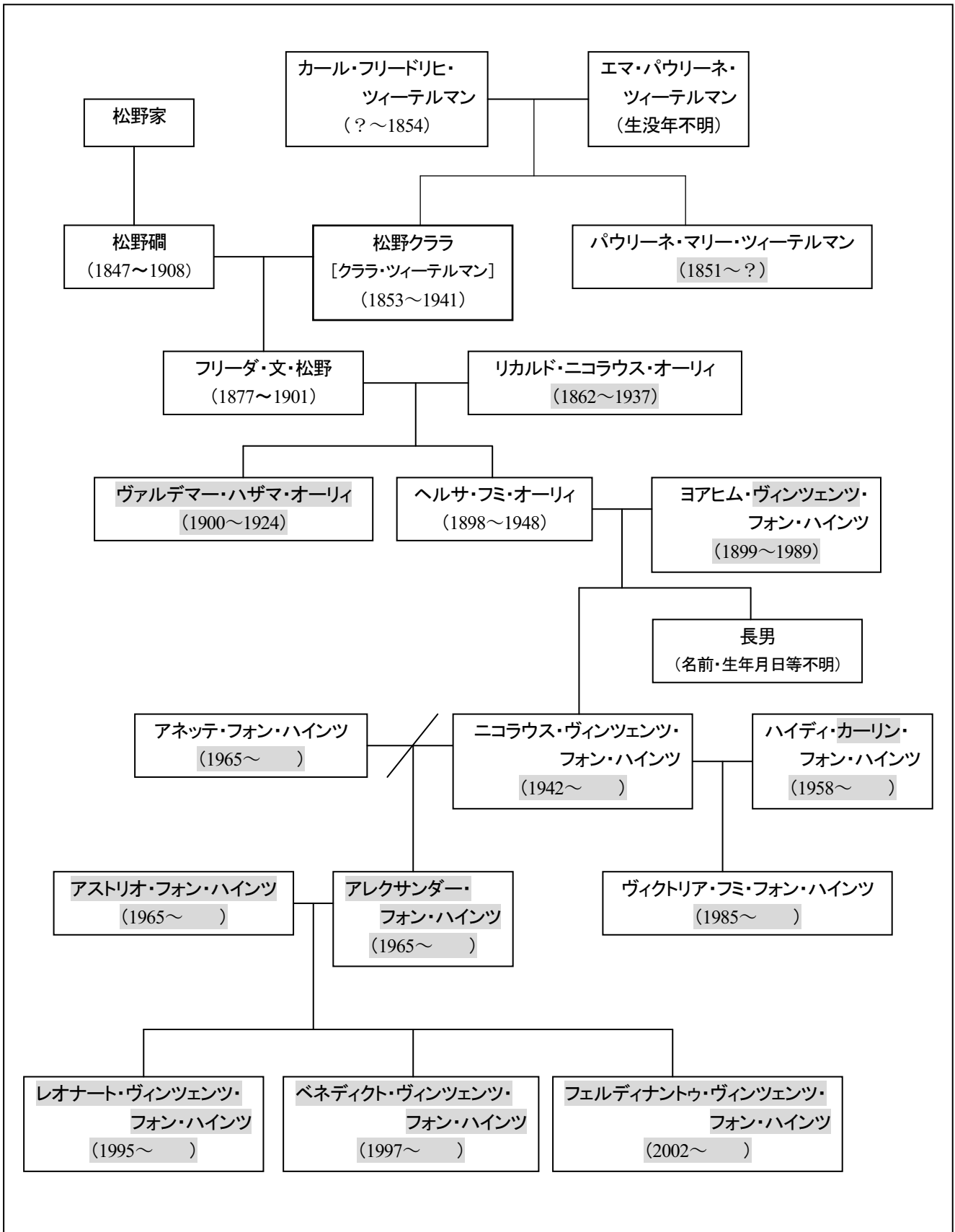


図1. 松野クララ家系図

家系図については、小林富士雄「松野磯とクララ夫人—曾孫ニコラウス氏の来日を機に—」2004、「『松野磯とクララ夫人』補遺—松野墓地修復を機に—」2008、「先達の遺

業を偲んで—松野磯墓地修復と墓碑建立の記録—」2008、を主に参照しながら著者が家系図にまとめ直した。なお、網掛け箇所は、平野正久氏とクララの曾孫であるニコラ

ウス氏の協力を得て家系図‘Stammbaum von Clara Matsuno (geb. Zitelmann)’ 2003 を作成していた石橋哲成氏から2009年9月3日に頂いたものを使用し、そこから新たにわかった箇所を日本語表記に変換し、引用した。

謝辞

本研究ノートを執筆するきっかけとなったのは、大学院修士課程1年次前期に行われた「教育思想史特論」（山崎洋子先生）の課題において、フレーベル教育の日本への導入について調べ始めたことにある。

明治期においてフレーベル教育の導入過程に携わった人物を調べてゆくうちに、松野クララが重要な役割を担っていたことを知るとともに、その経歴に様々な見解があることがわかった。

その後、松野クララについて資料収集を行う中で、夫である松野礪について研究されている大日本山林会前会長の小林富士雄氏を知った。失礼ながら大日本山林会を通して連絡を取っていただいたところ、小林氏は快く資料を送ってくださった。さらにそこから、クララの曾孫であるニコラウス氏の来日の際に、通訳をしておられたのが、大阪大学人間科学部で教授を務めた後、日本大学文学部に異動された平野正久先生であることがわかった。奇遇にも平野先生が、山崎先生の恩師でおられたつながりから、

ご多忙にも関わらず、お会いする機会を得ることが出来た。

2009年8月30日にお茶の水女子大学（元東京女子師範学校）へ資料収集に行くとともに、同年9月3日には、平野正久先生と、さらにペスタロッチ、フレーベルの研究者であり、松野クララについても研究をされている玉川大学教育学部の教授である石橋哲成先生を山崎先生からご紹介いただき、クララについてのお話をうかがうことが出来た。それだけにとどまらず、お話をうかがった後には、青山霊園にある松野礪と娘のフリーダ・文が眠る墓に案内していただき、歴史ある墓石を直に拝見することが出来た。

このように、多くの方の協力を得て、この研究ノートの執筆にあたったことに感謝を申し述べたい。資料提供をしてくださった小林富士雄氏、ご多忙の中貴重なお話を聞かせていただくとともに、最新の研究資料を快く提供してくださった平野正久先生、石橋哲成先生、また資料収集・歴史資料館案内を快諾してくださったお茶の水女子大学附属図書館の方、そしてこの研究のきっかけを与えてくださり、多方面において仲介をしてくださった山崎洋子先生、この研究ノート執筆にあたり、昼夜を問わず親身に指導し、論文執筆の手ほどきをしてくださった指導教授の西本望先生にこの場を借りて厚く御礼申し上げたい。

一注一

- 1 ツィーテルマンの表記には、“Zitelmann”や“Zietelmann”“Ziedermann”など文献によって様々な表記がされている。このことについては、中村理平が『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説—』（刀水書房、1993、pp. 225-227）でも指摘している。ここで中村は、クララの結婚についての公文書を示し、“Zitelmann”が正式の綴りとみなしても異論はないであろうとしている。よって、本研究ノートでも、ツィーテルマンの綴りを、“Zitelmann”とする。
- 2 石橋哲成「コラム 松野クララ」浜田栄夫編著『ペスタロッチ・フレーベルと日本の近代教育』玉川大学出版部、2009、p.107
- 3 ここでの「保母」とは、現代で言うところの「幼稚園教諭」を示す。
- 4 松野礪は明治時代の林学者である。1847（弘化4）年生まれ。1870（明治3）年末に北白川宮のドイツ留学に際し、蘭・独両語の学力が買われ随行する。ドイツのエーベルスヴァルデ高等山林学校で林学を学び、1875（明治8）年帰国。その後、内務省にはいり、山林局を創設。のち東京山林学校校長、東京農林（のち帝国大学農科大学）教授、林業試験所長を歴任し、わが国の林学を創始した。（小林富士雄「松野礪とクララ夫人—曾孫ニコラウス氏の来日を機に—」『林業技術』

- No. 748, 2004, p. 32・日本人人名辞典、ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)、入手先<<http://www.jkn21.com>> 2009-05-27)
- 5 小林富士雄「松野礪とクララ夫人—曾孫ニコラウス氏の来日を機に—」『林業技術』No. 748, 2004, p. 35
- 6 中村理平『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説—』刀水書房、1993、p. 203
- 7 石橋哲成、前掲書
- 8 同上
- 9 倉橋惣三・新庄よしこ『日本幼稚園史』東洋書店（初版）1930、フレーベル館、新訂版1956、p. 237
- 10 同上書、p. 120
- 11 中村理平、前掲書、p. 220, 222
石橋哲成、前掲書
- 12 石橋哲成、前掲書
- 13 同上
- 14 倉橋惣三・新庄よしこ、前掲書、p. 344
- 15 上笙一郎・山崎朋子『日本の幼稚園』理論社、1965、p. 16
- 16 同上書、p. 17
- 17 同上
- 18 南雲元女「松野クララの人間的側面」『日本保育学会大会研究論文集』、1976、p. 116
- 19 中村理平、前掲書、口絵IV、図21-23

- 小林富士雄, 前掲書, p. 34
- 20 中村理平, 前掲書, pp. 201-233
- 21 南雲元女「松野クララの人間的側面—研究ノート(その一)」『幼児の教育』1976, pp. 32-37
南雲元女「松野クララの人間的側面—研究ノート(その二)」『幼児の教育』1976, pp. 12-17
- 22 鷗原晶子「Margarethe Meyer Schurz の研究(2) —M.M. シュルツと松野クララを比較して—」『日本保育学会大会研究論文修』50号, 1997, p. 378
- 23 倉橋惣三・新庄よしこ「序」前掲書
- 24 中村理平, 前掲書, pp. 201-233
- 25 曾我芳枝「明治初期の唱歌遊戯教育に関する一考察—松野クララの役割を中心として—」『東海保健体育科学』17号, 1995, p. 20
- 26 酒井玲子「日本におけるフレーベル教育の伝統—25周年記念 Jubiläum に寄せて—」『北星学園大学文学部北星論集』21号 1983, p. 112
- 27 著者挿入部
- 28 酒井玲子, 前掲書, p. 112
- 29 同上
- 30 ペスタロッチ・フレーベル・ハウスのホームページ
(http://www.pfh-berlin.de/index.php?en/inhalt/ueber_das_pfhおよび,
<http://www.pfh-berlin.de/index.php?en/inhalt/geschichte>)
において、「It was founded in 1874 by Henriette Schrader-Breymann, ...」や「In 1874 Henriette Schrader-Breymann, a great niece of Fröbel, developed the theory further, putting Pestalozzi's and Fröbel's teachings into practice and creating not only kindergartens in Berlin but also a training centre for the formation of women teachers, a profession then still to be acknowledged as such.」の記載がある。
- 31 岡田正章「幼児教育の発足」国立教育研究所編『日本近代教育百年史 第六巻 学校教育 4』教育研究振興会, 1974, p. 1049
- 32 文部省編『幼稚園教育百年史』ひかりのくに, 1979, p. 53
- 33 倉橋惣三・新庄よしこ, 前掲書, pp. 338-339
- 34 同上
- 35 日本人名大辞典, ジャパンナレッジ (オンラインデータベース), 入手先<<http://www.jkn21.com>>2009-05-27
- 36 倉橋惣三・新庄よしこ「序」前掲書
- 37 倉橋惣三・新庄よしこ, 前掲書, p. 237
- 38 表1, 2で示した資料の多くも, 東京女子師範学校附属幼稚園の設立について語る際に『日本幼稚園史』を引用・参考文献として挙げている。
- 39 倉橋惣三(1882~1955)は, 大正・昭和期の幼児教育者である。“日本のフレーベル”とも呼ばれ, 「生活を, 生活で, 生活へ」の考えを基に, 幼児の自発性を尊重した保育理論を展開した。さらに, 日本幼稚園協会会長を務めた後, 1948(昭和23)年には日本保育学会を設立し, 日本の幼児教育を大きく発展させた。これらの点については, 村山貞雄「倉橋惣三」村山貞雄監修『幼児保育学辞典』(明治図書出版, 1980, p. 212), 水野浩志「倉橋惣三」岡田正章・森上史朗編『保育基本用語事典』(第一法規出版, 1980, p. 397), 著者不明「倉橋惣三」幼少年教育研究所『幼稚園事典』(鈴木出版, 1994, p. 15), 宍戸健雄「倉橋惣三」日本ペスタロッチ・フレーベル学会編『増補改訂版ペスタロッチ・フレーベル事典』(玉川大学出版部, 2006, pp. 88-89)を参照されたい。
- 40 松野クララが東京女子師範学校附属幼稚園で勤めていたのは(保育練習科での期間を含めても)1876(明治9)年から1881(明治14)年であり, 倉橋惣三が1882(明治15)年に生まれたことを考えると, 二人が直接出会ったということとは考えられない。
- 41 倉橋惣三・新庄よしこ「序」前掲書

(受理日: 2010年1月30日)